一、人々參會之時分美食を好、無謂諸道具を翫び、剩武藝には初々敷躰之族も多有之樣相聞候。一向參會不仕儀も若き人々難成事歟。折節は湯漬飯輕く一汁一菜にて、穩便に參會、勤仕等之儀申談は各別に候。夜中に至候ては、歴々を始無僕躰之族も有之樣相聞候。武士道は晝夜に差別無之事に候。ヶ樣に候ては、其以下猶以亂行見習不可然事。

一、御門外に行歩等に罷越候とても、其身代相應に人馬召連可申處、近き頃は人々勝手次第之樣子、其先々にて不作法尾籠之仕形有之段、具に被聞召置候。ヶ樣之族は武士道取失ひ申樣に被思召候。急度被仰付樣茂有之候得共、先此度は被思召候御旨有之、御用捨被遊候。以來右躰之族於有之は、御家中之御見せしめのため、急度曲事に可被仰付候事。

附、跡々如御定、傾城町・船遊其外見物場、惣而群集之場所に立越候儀、御停止に候條、彌其心得可有之事。

一、惣而御家中之面々儉約を不用、自分之榮耀享樂遊興を所業として、無用之費多、故なく勝手を取失ひ、其而已ならず他國往返度々、御譜代にあまへ何廉難澁仕候。是等之趣頭々其心得なく、平生油斷之仕形与被思召候事。

附、近年は美服を着し、無御免に紅裏を着用之もの茂有之樣に被聞召候。萬端手ぬるき樣子に被思召候事。

右之趣得其意、以來嚴重に可相守旨被仰出者也。

享保十一年三月七日

可申渡趣

御家中之人々致困窮候に付而、取續之儀去年被仰付候得共、一統風俗惡敷、不覺悟之族花麗而已に候。近年は江戸詰之面々、御長屋其外於御門外不慎之躰、且又道中無用之飾有之候故、入用致不足、每度何廉及斷不心得之至に候。依之今般御印之御書出被渡下候間、可有拜見候。猶更年寄中迄被仰出之趣、別紙覺書に記候通に候。今般之被仰出は、第一他國詰人之儀に候得共、一統風俗を相慎、萬端儉約を用、猥に無之樣に急度可被相心得候。御當地之儀は、猶更追而被仰出茂可有之候。則兩通相渡候間、被得其意、組・支配に被申渡、組之内裁許有之人々には、其支配にも申渡候樣可被申聞候。右之趣御請可被上之事。

三月十六日

一一　家中之人々儉約之儀に付觸

御家中之人々儉約之筋、御先代御定之趣急度相守候樣、去秋以御印章被仰出、當春も段々被仰出通に候。猶更委細之儀は、追而年寄中より可申渡候得共、先左之品々先規より御定之通、且近年年寄中より申渡候趣を以、嚴重相守可申候。

一、衣　類　之　事。
一、音信贈答之事。
一、鷹　之　事。
一、婚禮之節之事。
一、葬送法事等之事。
一、饗應又は公私之儀に付參會之節料理等之事。
一、家　作　之　事。

右品々は儉約之基に候條隨分省略可仕候。

一、前々より被仰出候御制禁之筋、且又内外行狀之儀、是又綿密に相慎、文武之道不忽樣に相心得可申候。

右之趣先申渡候樣被仰出候條、頭々其身を初、組・支配之人々に被申渡無油斷可有指引事。

八　月

御家中儉約之儀、前紙覺書之通に候條、婚禮・家作又は祝儀事等之儀茂、其樣子時々頭々委細被承屆候上、急度可被及差圖事。

（享保十一年）八月

一二　大小將行狀風俗之儀に付觸

前々より御大小將、行跡・風俗等不宜人々茂有之儀候條、當時其表相詰有之候御大小將初、御手前支配之面々行跡之儀、尙更急度相慎、尤諸事儉約を用、花麗之儀無之樣彌被申渡、萬端其心得を以可有差引候。此段可申越之旨被仰出候に付如斯に候。猶奥村織部等にも申遣候。諸役人中一統申聞筈に候條、可有示談候。以上。

（享保十三年）三月廿四日　　長　九郎左衛門

松尾縫殿殿